

医学資料館へのいざない

医学部 藤田尚男

広島大学医学部医学資料館が誕生した。明治43年より大正4年の間に広島市霞町に兵器廠として建てられ、昭和32年に医学部が呉市より移転してから約20年間校舎として使用して来た、思い出深い「赤レンガ」の一つがそれである。

本資料館は、昭和50年におこなわれた医学部創立30周年記念事業の一環として計画されたものであるが、その動機は、十棟あまりの赤レンガの建物が近年の医学部の改築にともない姿を消すことになり、医学部や同窓会の人々の間に「赤レンガを残そう」という熾烈な声が澎はいとして起ったのにはじまる。その後紆余曲折を経たがようやく完成し、昭和53年11月2日に開館記念式典がもよおされた。そのいきさつは本学西丸和義元教授によって広島医学32巻1号にくわしく述べられている。

われわれは、長い間に人類が生み出して来た学問や文化を背景として現在の医学が存在するということを、よく自覚せねばならない。欧米の大学の医学部では一般にこのような施設がよくゆきとどいている。医学の教育や研究はこのような史的基盤と、そして、そこから起る医の倫理をもとにして行われねばならない。例をイタリアのパヴィア (Pavia) 大学にとってみよう。ここの医学博物館およびそれぞれの講座には中世の創立期から現在までに輩出した多くの学者の像、その人々によって築かれた業績 (論文、標本、遺品など) が並べられ数百年の偉大な歴史が年輪を忘れさせる新鮮さで強くせまって来たのを思い出す。そこには人類の歩んで来たロマンチックにして厳粛な姿がみなぎり、医学を志す者をして限りない使命感を湧き起させるのであった。内耳の構造、とくにラセン器 (コルチ器) にその名の残るコルチ (Corti)、神経の渡銀法や細胞のゴルジ装置で有名なゴルジ (Golgi)、細胞間の接着装置であるデスモソーム (Node of Bizzozero) を発見したビツォツェロ (Bizzozero)、内耳の膜迷路を発見したスカルパ (Scarpa) など何十人もの学者の名と顔と業績が生きてわれわれに呼びかけてくるようであった。生きた医学史、世界史に触れることができたといっても過言でなかった。

また、イギリスのケンブリッジ大学の科学史博物館に足を踏み入れると、気体の体積と圧力の関係について $PV=K$ の法則を発見したボイル (Boyle)、コルクの孔を細胞と名づけ、また弾性の伸びについてフックの法則を発見したロバート・フック (Robert Hooke)、万有引力の法則を発見したニュートン (Newton) などの多くの業績や資料が時代を超えて生き生きとわれらに語りかけ、さらにはこのように遠い昔に活躍した科学者の原著にも、決して現在とかけはなれた古文書を見るときのような気持ちでなく、当時から現在に至るまで連綿として生き続けている科学の背景を感じることが出来たのであった。そして偉大な学問は意欲と、好奇心と、努力にささえられ、頭や眼だけでなく、体を動かして生れるものであるということ、いいかえれば「学問は全身でやるもの」ということを教えられたのであった。

わが国の大学のスペースや設備をかえりみると、過去も未来もなく、現在の活動にだけ役立つように、あまりにも無駄なく設計されているのに気づく。明治初年から欧米に追いつけとの掛声のもとに急速に進歩して来た医学は、たしかに現時点の競争においては欧米をしのぐところにまで達

した。しかし、医学にたずさわるもののほとんどが「現在」のみに生きており、ふりかえって人類の歩んで来た足跡を理解し、未来を創造するというスケールの大きい眼に欠けているように思えてならない。教授が定年を迎える前には膨大な標本、写真、別刷、書物などを、それが大切なものであるにもかかわらず、何らかの形で処分しなければ、次の世代が活躍するスペースを欠くのが一般である。そして世界や国はおろか自分の属する研究室についてさえ、過去にどのような教育や研究がなされて来たかについては知る由もなくなっている場合が多い。

エッケルマンの「ゲーテとの対話」によれば、ゲーテは獨創性とは古今の賢人に問い、伝統を尊重する所から生ずるものであって、無から生ずるものではないことを何回も説いている。ちなみに、ゲーテの「ファウスト」も、シェークスピアの「ハムレット」も、古いヨーロッパの伝統に端を発している。およそ自然現象、社会現象を問わず、その由来をたどることが、本質を把握するのに大切であることは論をまたない。これらの事実をかえりみると、本資料館開設の理念は思いなかに過ぎるものがある。

資料館二階の第一展示室は約 216 m² (平方メートル) の広さで世界の医学史、日本の医学史、広島県の医学史、広島大学医学部の歴史を物語るそれぞれのコーナーにわけられている。

世界の医学史のコーナーには古代のヒポクラテスやガレノスをはじめとして、中世を経て現在に至る著名な学者約 50 人のポートレートと略歴が示されている。また 1543 年に出された人体解剖書であるベザリウス (Andreas Vesalius) (1514~1564) のファブリカ (Fabrica) (復刻版)をはじめとして耳管 (欧氏管) を発見したオイスタキオ (Bartolomeo Eustachio) (1520~1574) や毛細血管を発見したマルピギー (Marcello Malpighi) (1628~1694) の著書などが目を惹く。この当時の古書は高価であり、その展示はきわめて不十分であるが、壁にかけられた大きい年表を対照すれば大ざっぱに世界の医学史の流れを把握できると信じている。医学を志す者にとってこの程度のことは常識であると思われる。これらの書はたんに眺めるだけでなく、同時に世界の歴史を理解するよすがにして頂ければ幸である。例を「ファブリカ」にとろう。ヴェザリウスによって書かれたこの不朽の名著を見るとときには、ガレノス (Galenos) (130~201) 以来、約 1300 年の間全く進まなかった人体解剖学がルネッサンスに起こった、「自らの手を汚して解剖し、自らの眼で観察する」という精神によって急速な進歩を示した事実を思いあわせて頂ければ、その理解も一層深まると思われる。嘗て栄えたギリシヤやローマの文明が、ゲルマニア民族の移動に始まる蛮族の進入によって破壊され、中世の長い暗黒時代を迎えたこと、中世後期 (11 世紀頃) より、ヨーロッパに大学が出現し、13 世紀頃より人体解剖が始められたが、当時は教授はガレノスの教典を読み下手人がそれに合わせて解剖するというシステムが長く続き、新しい知見がほとんど得られなかったこと、この当時の学者の一人がボローニア大学のモンディーノ (Mondino de Lussi) (1275~1326) であったことなどを知っていただくと、それだけでも色んな知的興味をそそられることになる。因みにモンディーノの解剖図も展示されている。そして中世後期からルネッサンスに至るあらゆる文化の流れと医学の発展の関係に思いを致して頂くだけでも意義は大きい。このように眼をこらして見て頂くと、どのポートレートにも人類の歩んで来た医学へのいざないがひそんでいと信じている。

江戸時代までの日本の医学は中国に負う所が大きい。中国最古の医学書である「内径」や「傷寒論」の写本、日本最古の医学書である、平安時代に丹波康頼により出された「医心方」(復刻版)をはじめ数多くの江戸時代の医学書やポートレートなどが説明とともに日本の医学史のコーナーに展示されている。順を追って歩けば漢方医学にはじまり西洋医学の伝来を経て明治時代の医学に至るまでのいきさつをおのずとかぎとれるようにしたつもりである。これに加え世界に誇る麻酔医、

華岡青洲についてはとくにコーナーをもうけ、それにちなむ書や図が示されている。

広島県の生んだ偉大な医学者としては、まず「万病一毒説」の吉益東洞と、シーボルトとゆかりの深い眼科医である土生玄碩をあげねばならない。とくに前者については、ややくわしい略歴、ほとんどすべての業績が肖像画とともに飾られているが、後者の資料の蒐集は今後にもたねばならない。また明治以後については、呉秀三、富士川游、永井潜などのゆかりの写真や業績が郷土の誇りとして並べられている。

広島大学医学部の歴史を示すコーナーには、主にパネルを用い、明治初期に発足し、廃校になった広島医学校と、昭和20年8月5日に開校した広島県立医学専門学校が、県立医科大学に昇格し、さらに広島大学医学部となる間に、県下を転々とした跡とをふりかえるようにできている。いわば写真で見る本学部の発展史である。また、開校当時に発行された学術雑誌や、思い出深い紛争の歴史を物語る書類なども陳列されているが、本学創立の頃の詳細ないきさつについてはなお明らかにすべき多くのことが残されている。

第二展示室は広さ約158㎡(平方メートル)で医学部各講座の資料を示す部屋になっている。各講座あて一個ずつの展示ケースに講座の歴史、業績、現在の研究活動を示す資料が集められている。今後の教室の発展とともにそれを誇る資料が増えていくことであろう。

第一展示室と第二展示室の間の廊下を挟んで存在する四個の部屋は書庫と資料室にあてられ、展示しきれない書物や資料を保管し、研究者の便に供している。

われわれが自覚せねばならないことは資料館が単に古いものを集めるだけに終わってはならないということである。本資料館を医学の教育、研究に大いに活用していただきたい。人類が生み出して来た医学の発展のあとをたどることによってわれわれは、明日の医学の進むべき道を悟ることができるのである。医療および医学にたずさわるものは技術以前にこのことを十分に自覚せねばならない。例えば、肝臓のクップェル(Kupffer)の星細胞を研究するとき、この細胞の発見にまつわる物語を学び、クップェルの肖像や人柄を知るだけでもこの細胞に対する生きた関心が深まり、優れたアイデアが出てくることであろう。このような意味から古文書の展示のみでなく医学の歴史関する内外の図書や雑誌をできうる限り購入、蒐集したい希望をもっている。展示された書類、書庫におさめられた資料などは現物をお貸しすることは出来ないが、そのコピーによって研究者に利用頂けるようになっている。これらが大いに活用され医学史の研究の場となることも本資料館の大きい使命の一つである。これらを利用して、医学史に関する優れた論文や学会発表が出てくることを強く期待したい。

古より、多くの先輩は「医師の倫理」ともいうべき、医学にたずさわるものにとっての大切な「教え」を説いて来た。「ヒポクラテスの誓」は、多くの欧米の大学では医学生のバイブルとされ、卒業式に学生に配布し、「誓」を立てさせるところさえあるときいている。わが国でも江戸末期に緒方洪庵はフーフェランドの内科書の中にある医師の教えを要訳し「扶氏医戒之略」と題し、適塾の門下生に守るべき道として示された。本資料館の開館にさいし記念として「扶氏医戒之略」の復刻を出席者に配布した。

本資料館の完成には、医学部と同窓会の人々の一体となつての意欲、広島県医師会の方々の古文書の寄贈を含む深い理解が大きい力になったことを忘れてはならない。しかし、本館は遠い理想に向かってスタートを切ったに過ぎず、資料も設備も極めて貧弱である。永遠に発展し、所期の目的にかなうべく努力するとともに、皆様の御援助をお願いするものである。